

## エンゲル係数40年ぶり高水準

日本のエンゲル係数が約40年ぶりの高水準に達したことがニュースになっている。エンゲル係数とは家計の総支出に占める食料品への支出の割合のこと。こうした動きから想定されるのは、食料品の価格上昇が家計を圧迫しているという姿だ。食料品の支出を削ることは難しく、価格が上昇しても購入量を抑えることにも限界がある。それゆえ、エンゲル係数が上昇するという構図になっている。

インフレが顕著になってきたこの数年、エンゲル係数の数値は上昇している。一般的に所得の低い世帯の



伊藤元重の

### エコノウオッチ

方がエンゲル係数は高くなりやすい。低所得者層を中心に高騰する食料品の価格への防衛的な行動が観察される。ナショナルブランドよりも低価格で提供されるプライベートブランドやストアブランドなどへ、消費の一部がシフトしているのはそうした現象だろう。

ただ、エンゲル係数が近年上昇している背景には、別の側面もある。戦後直後の日本が貧しい時期には、日本のエンゲル係数は65%を超えるような高い数値であった。生活費の大半が食料に使われた時代であった。その後、時代とともに

## ワケは値上げ以外にも

エンゲル係数は下がり続け高度経済成長期には30%台、そして2000年以降は25%を切るような水準となった（いずれも2人以上の世帯の係数）。

ただ、その後エンゲル係数は少しずつ上昇を始め、直近では30%に近づく勢いで、過去40年ほどで最も高い数値となっている。こうした動きの背後には、私たちの食生活の変化があることは明らかだ。

多くの消費者は、総菜や冷凍食品などある程度加工したものを購入する傾向がより顕著になっている。買って来たものをそのまま食卓に並べられる中食などはその典型だ。

店の段階ですでに付加価値がついている商品は素材としての食料品よりも割高になる。その分、エンゲル係数が高くなる。戦後50年以上に渡って下がり続けてきたエンゲル係数がこの20年ほど上がる傾向を示しているのは、こうした購買行動の変化が背景にある。

こう考えてみると、日本のエンゲル係数が約40年ぶりの高さであるということ

は、食料品の価格高騰による影響だけではなさそうだ。低所得層を中心に、生活防衛のために安価なプライベートブランドへのシフトが起きているという面もあるが、他方で中食や総菜のように付加価値の加えられた食料品へのシフトが進んでいるという側面もある。

言うまでもなくこうした商品の価格は割高となるので、消費者はより高い価格を受け入れていることになる。低価格化と高価格化の分化が、エンゲル係数上昇の背後で進んでいる。

（東京大学名誉教授）